

海外調査報告

コロンビア・ボゴタの民家庭園

外間 数男

(JICA コロンビア支所)

Kazuo HOKAMA: Home gardens in Bogota • Colombia.

はじめに

コロンビア・ボゴタの市街地は南北に長い。その中ほどに旧市街（都心）がある。旧市街はボゴタ市の発祥の地であり、官公庁など多くの行政機関が集中する地域でもある。またこの地域には多くの歴史的建造物が残されている。これらの古い建築群（写真1）にはパティオ（中



写真1. ボゴタの旧市街にある古い建築群。



写真2. パティオと噴水を中心に四分割された庭園。

庭）を持つ建築物が多く、噴水を中心とした四分割の庭園がよく見られる（写真2）。しかし都心から北の新興住宅地域にはパティオを持つ建築物は少ない。

都心から北は高級住宅地域として知られている。特にカジェ 72 からカジェ 127 に至る山手には高級住宅や高級マンションが立ち並び、富裕層の居住する地域となっている。これらの住宅やマンションには道路沿いに外付けの庭（外庭）を設けていることが多い（写真3）。



写真3. マンションの外付けの庭。

道路沿いの庭園には、草花類や樹木の他にイネ科やカヤツリグサ科などの植物が植栽されている（写真4）。イネ科やカヤツリグサ科植物が日本の民家庭園で植栽されることは極めて少ない（道下ら, 2004, 2005, 2006）。また民家庭園には植栽間に白い石礫を敷きつめることが



写真4. マンションの外庭に植栽されたカミガヤツリ（奥）とイネ科植物（手前）。



写真5. マンションの石礫を敷きつめた外庭。

ある（写真5）。これも日本で目にすることは少ない。

イネ科やカヤツリグサ科植物が日本の民家庭園に用いられることは少ないが、有色稲を「田んぼアート」展に利用することは1990年代頃から見られる。また有色ムギがフラワーアレンジに用いられ、その栽培も行われている。しかしカヤツリグサ科植物は一部の愛好家をのぞき、民家の庭園に栽植されることはほとんどない。ボゴタのマンションや住宅の外庭にはイネ科やカヤツリグサ科植物が植栽され、石礫を敷きつめた庭がよく見られる。それがボゴタで広く利用される理由を探りたいと調査を行った。その概要を報告する。

1. イスラム庭園

ボゴタの旧市街にある古い建築群のパティオ（中庭）と四分割された庭園はイスラム庭園の様式である。イスラム庭園の源流はペルシャ式庭園にあり、イスラム勢力の拡大に伴って東はインドから西はスペインまで広がっていった。スペインのアルハンブラ宮殿やインドのタージ・マハル廟はイスラム建築の粋を集めたものである。その中心になるのがパティオである（岩切；2002，鳥居；2009，2010）。

イスラム庭園の発祥の地であるペルシャはイランの旧称。紀元前5世紀のペルシャは、東のパキスタンから西のトルコ、エジプトにいたる広大な地域を治める帝国であった。しかし紀元前4世紀にアレキサンダー大王に滅ぼされ、7世紀にはイスラム勢力、13世紀にモンゴル帝国の征服を受け繁栄と滅亡を繰り返してきた。その栄枯盛衰のなかで、ペルシャ文化は綿々と受け継がれ、建築や絵画、手織物（絨毯）など世界的な芸術作品を今に伝えている。

ペルシャ式庭園も過去から現在に受け継がれている庭園様式である。庭園は壁や塀で囲まれたパティオ（中庭）にある。外界とは壁や塀で遮り、その内部（パティオ）に水、緑のある庭園を造った。庭園の特徴は水路を中心に四分割された庭園である。スペインでは十字路庭園ともいわれる。四分割の庭園は古代ペルシャ人にとって宇宙であり、神聖な宇宙の4大要素（水、火、風、地）である（鳥居；2009，2010）。

庭園は、砂漠に囲まれ、砂漠とともに生きて民にとって桃源郷である。砂漠は過酷な自然環境であり、そこで生活するうえで水は欠かせない。また水こそ命の源である。この過酷な自然環境を避けるために建物は外に密閉、内に開放された構造となっている。庭の中心には泉（噴水）があり、四分割の庭園に草花や木々が茂り

人工のオアシスとなっている（神谷；1989，鳥居；2009，2010）。

この様式をとどめている建築物がボゴタの旧市街にある。旧市街の古い建築群は外壁を堅固にし、開放口の少ない構造である。建物の内部に入ると明るいパティオにつながる。パティオは明るい日の差す空間であり、四方にある部屋への出入り口にもなっている。そのパティオの中心に噴水があり、四等分された庭園がつけられ、草花、樹木が植栽されている。パティオは外に閉鎖的、内に開放された構造になっていることが理解できる。

2. ボゴタの民家庭園

コロンビア・ボゴタの高級住宅地域では、道路に面した一角に外付けの庭を設置することが多い。敷地の広いところでは内庭も設けられているが、外部から見ることはできない。そこで今回の調査は道路沿いの外庭だけとなる。調査は2014年6月から10月にかけて逐次行った。

調査地域はカラカス通りの東側、カジェ 94 からカジェ 124 にいたる住宅地域である。調査対象地域の全てを調査することは難しく、対象地域の一部に限った調査となる。調査地域の建物はボゴタの都心に比べて新しく、古い建築群は見られない。ほぼ数十年単位の建築物が多く、新築のマンションなども混在する。また同地域には公的施設やオフィスビルなどもあるが、調査対象としてはごく少数である。

調査をした民家の外庭はほぼ数十平方メートルの規模である。庭は道路と建物の間につくられ、水平、ひな壇状になっているが、大部分は道路と水平にある。これら庭には草本類や樹木、生垣などが植栽されており、その植栽間に石礫が敷き詰められ、また芝生が張られている。植栽間に敷かれる資材の種類を調査したのが表 1 である。

表中には調査地点ごとの各資材の利用庭数を示してある。235ヶ所を調査したなかで、芝生のみを張った庭は104ヶ所（44.2%）と最も多

表 1. 民家庭園の植栽間に使用される資材の種類と利用状況。

調査地点	調査庭数	石 礫	芝 生	芝生+石礫	石礫+裸地	裸 地	コンクリート
カジェ 94	16	4	8	1	1	2	0
カジェ 95	23	6	10	1	1	4	1
カジェ 96	14	5	5	1	0	3	0
カジェ 97	17	5	4	3	0	5	0
カジェ 98	10	3	2	1	2	2	0
カジェ 100	26	3	10	6	0	5	2
カレラ 19	10	3	6	0	0	0	1
カレラ 21	12	2	7	1	0	2	0
カレラ 22	19	6	10	0	0	2	1
カジェ 118	15	3	6	2	3	0	1
カジェ 122	20	3	14	1	1	1	0
カジェ 124	21	4	9	3	0	4	1
カレラ 23	32	10	13	5	2	1	1
計	235	57	104	25	10	31	8

く、次いで石礫を敷きつめた庭が 57 ケ所 (24.3%) であった。芝生と石礫を併用して敷きつめた庭は 25 ケ所 (10.6%)、一部だけ石礫敷きとし残りを裸地にしたのが 10 ケ所 (4.2%) であった。芝生、石礫のいずれも敷いてない裸地の庭は 31 ケ所 (13.2%)、コンクリート敷きが 8 ケ所 (3.4%) あった。大部分の庭は植栽間に何らかの資材が用いられている。また石礫を単独、あるいは他資材と併用している庭の数は 92 ケ所 (39.1%) もあり、4 割近くで石礫が用いられている。

植栽間に敷きつめられる石礫は、庭の構成として重要な役割を果たしている。石礫は 5cm 内外の砕かれた自然石であり、磨かれたり、形づくられたりすることはない。また丸い川石も用いられているが多くはない。石礫は白から茶褐色、黒褐色までであるが、茶褐色が一般的であ

る。しかし栽植間に白石を用いるのが色鮮やかで、豪華に見えるが利用は少ない。手に入り難いこと、高価なことなどが理由として挙げられる。

また外庭には樹木も植栽されるが、樹木なしの庭も多い。外庭の樹木の植栽状況について調査した結果を表 2 に示した。調査した 235 ケ所の庭のなかで樹木を植栽しているのは 111 ケ所 (47.2%) と半分に満たない。樹木を植栽していない庭は 124 ケ所 (52.3%) もあり、調査した庭の半数以上は樹木のない庭であった。植栽されている樹木は 3m 以下が多く、数 m の高木は極めて少ない。3m 以下の植栽樹が多いのは、剪定や幼木によるものである。樹木は疎に植えられることが多く、密になることは少ない。庭の施工や管理は造園業者や雇人に委ねられているようである。

表 2. 民家庭園の樹木の植栽状況.

調査地点	調査庭数	3m > ¹⁾	高低混 ²⁾	3m < ³⁾	備考 (樹種など)
カジェ 94	16	3 ⁴⁾	1	2	
カジェ 95	23	3	3	4	ハイビスカス
カジェ 96	14	1	1	6	
カジェ 97	17	4	1	1	ヘゴ、
カジェ 98	10	2	2	3	ヤシ、ヘゴ類
カジェ 100	26	6	3	1	ハイビスカス、シダ
カレラ 19	10	6	2	1	
カレラ 21	12	7	0	1	ヤシ、ハイビスカス
カレラ 22	19	6	1	1	
カジェ 118	15	4	1	2	ハイビスカス
カジェ 122	20	8	2	1	
カジェ 124	21	5	1	0	
カレラ 23	32	8	1	6	
計	235	63	19	29	

- 1) : 3m 以下の樹木が植栽
 2) : 高低混 : 高・低木の混栽
 3) : 3m 以上の樹木が植栽
 4) : 欄内の数字は庭数。垣根は除いた。

3. 民家庭園の植栽植物

ボゴタの民家庭園には多くの草本類が植栽されている。外付け庭に植栽されている植物の種類は表3に示すとおりである。調査地域の一部に限定したものではあるが、おおむねの様子がわかる。また表中に示した植栽植物は名前のわかるものだけであり、未知の植物については除いてある。栽植植物のすべてが対象ではないので、実情と幾分異なるかもしれない。しかし未知の植物は栽植植物として少数であり、表中にある主要な既知植物の頻度に違いはない。

表3. 民家庭園に植栽される植物の種類と利用頻度 (各種類/庭数¹⁾ × 100)

種 類	%
ベゴニア	62.1
マオラン	46.6
カミガヤツリ	34.5
シダ類	22.4
ハイビスカス	17.2
バラ	17.2
アパガンサス	17.2
ヤシ類	15.5
ツツジ	15.5
Pennisetum sp.	12.1
Hiedra sp.	12.1
カラー	10.0
アジサイ	8.6
ヘゴ類	8.6
ハボタン	5.2
ハナキリン	3.4
モンステラ	3.4
シロガネヨシ	3.4
シュロガヤツリ	1.7
Thunbergia sp.	1.7
竹	1.7
サンセベリア	1.7

1) : 58

外庭に植栽される草本類、樹木で最も多いのはベゴニアである。調査庭の半数以上(62.1%)で植栽されている。次いでマオラン(写真6)の46.6%、カミガヤツリ(写真7)の34.5%である。またイネ科植物ではPennisetum sp. (写真8)の植栽が12.1%と多



写真6. マンションの外庭に植栽されたマオラン(奥)とベゴニア。



写真7. 外庭に植栽されたカミガヤツリ(Cyperus apyrus)。



写真8. 石礫と芝生敷き庭のイネ科植物のPennisetum sp.

く、シロガネヨシ (パンパスグラス) (写真9) は3.4%, 竹 (写真10) が1.7%であった。また熱帯植物ではハイビスカスの植栽が17.2%と多く、ヤシ類15.5%, ヘゴ類8.6%が植栽され



写真9. シロガネヨシ (パンパスグラス).

ていた。

イネ科及びカヤツリグサ科植物に限った調査の結果を表4に示した。イネ科では Pennisetum sp.の植栽が多く、235ヶ所中23ヶ所(9.8%)で植栽されている。シロガネヨシは3ヶ所(1.3%), 竹類が7ヶ所(3.0%)で植栽されていた。またカヤツリグサ科植物ではカミガヤツ



写真10. 庭に垣根として植えられた竹.

表4. 民家庭園におけるイネ科及びカヤツリグサ科植物の植栽状況.

調査地点	調査庭数	イネ科植物			カヤツリグサ科		
		P.sp ¹⁾	シロガネ ²⁾	竹類	C.p ³⁾	C.a ⁴⁾	C.sp. ⁵⁾
カジェ 94	16	1	2	1	2	0	0
カジェ 95	23	1	0	0	5	2	1
カジェ 96	14	0	0	1	6	0	0
カジェ 97	17	0	0	1	5	0	0
カジェ 98	10	1	0	1	4	1	0
カジェ 100	26	2	0	0	7	1	0
カレラ 19	10	3	0	0	2	0	0
カレラ 21	12	3	0	1	3	0	0
カレラ 22	19	1	0	0	1	1	1
カジェ 118	15	3	0	1	4	1	0
カジェ 122	20	4	0	1	7	1	0
カジェ 124	21	1	0	0	3	0	0
カレラ 23	32	3	0	0	7	0	0
計	235	23	2	7	56	7	2

1):Pennisetum sp.

2):Cortaderia selloana シロガネヨシ(パンパスグラス)

3):Cyperus papyrus カミガヤツリ

4):Cyperus alternifolius シュロガヤツリ

5): Cyperus sp.

りが56ヶ所(23.8%)で植栽され、シュロガヤツリ (*Cyperus alternifolius* L.) (写真11) が7ヶ所(3.0%)、カヤツリグサ科植物の一種が2ヶ所にあった。この結果は表3にある植栽植物の種類調査とほぼ同じであった。



写真11. 外庭に植栽されたシュロガヤツリとベゴニア。

ボゴタの民家庭園にはイネ科やカヤツリグサ科植物がよく見られる。特にカミガヤツリは広く植栽され、民家庭園の主要な構成植物となっている。またシュロガヤツリも色鮮やかな草本類との混植でコントラストのある植栽植物となっている。カヤツリグサ科植物は水辺の植物であり、噴水など水のあるところで映えるものである(写真12)。水辺を廃した庭では新たな居場所を確保している。また *Pennisetum* sp. のよう



写真12. 人口池の周りにカヤツリグサの鉢植えを配した庭。

な草丈の低いイネ科植物は石礫や芝生と一体的に植栽され、草丈の高いシュロガネヨシは単独に植えられていた。

おわりに

コロンビア・ボゴタの旧市街にはパテイオ(中庭)を持つ古い建築群がある。パテイオには噴水を中心として四分割の庭園が設けられている。この四分割の庭園はイスラム庭園の様式であり、ペルシャ式庭園の影響を受けたものである(神谷, 1989; 鳥居, 2009, 2010)。

ペルシャでは紀元前数百年前に壁や塀で囲われた建築様式が登場する。ペルシャ(イラン)は乾燥、半乾燥の国であり、砂漠気候である。和辻(1979)は乾燥の生活が「渴き」であるという。砂漠では自然の脅威と戦いながら草や泉を求めて放浪し、また他集団との戦いも強いられる。そのことから砂漠での生活は対抗的、戦闘的にならざるを得ない。町は自然に対抗するかたちに具現化したものだという。

ペルシャの壁や塀で囲われた建築様式は、砂漠、半砂漠の国では必然的なものであろう。壁や塀は外界の厳しい自然環境を避けることができ、また他集団から逃れることもできる。その中に泉を中心とした庭園がつくられ、オアシスとして過酷な自然を忘れさすものである。庭園は、砂漠に囲まれ、砂漠とともに生きた民にとって桃源郷であった(神谷, 1989; 鳥居, 2009, 2010)。

ボゴタの旧市街にある古い建築群は、建物の外壁で周囲を囲い、内部に噴水を中心として十字路のパテイオが設けられている。パテイオは静寂に包まれ、壁外の喧騒が内部まではほとんど届かない。まったくの異次元の世界である。パテイオには明るい日が差しこみ、木々や草花の緑が鮮やかである。噴水から流れる水の音が

暑さを忘れさせてしまう。砂漠の乾いた過酷な自然はパティオの中にはない。砂漠の民にとってパティオは地上の楽園であることがわかる。ボゴタの都心から北の住宅地ではパティオを持つ建築物は少ない。外付けの庭をもつ建物が多い。庭は小規模ながらも街路の景観形成に役立ち快適な空間を提供している。それらの庭には芝敷きも見られるが、石礫を敷きつめたのがある。この石礫敷きは生活の導線ではなく、庭の構成要素となっている。

日本でも石礫(砂利)を敷いた庭を目にすることがある。石礫は生活の導線や庭の構成として敷かれる。また砂が敷かれることもある。砂敷きの庭として龍安寺がよく知られている。砂敷きのなかに幾つかの石を散らばせた庭の構成である。加藤(1989)は龍安寺の石庭に普遍的な海を見出し、配置されている岩を島と見立てた。島は見る位置で変化し、広大な自然をいきいきと表しているという。ボゴタにある石礫敷きの庭はどう見えるであろうか。

ボゴタの石礫敷きの庭は、植栽植物や敷かれる資材と一体となって構成されている。石礫は植栽間のスペースを埋め、石礫の合間に植栽されている。また石礫は曲線に敷きつめられることもある(写真13)。この石礫敷きの庭は砂漠



写真13. 石礫を曲線に敷きつめた外庭。

を再現しているように見える。植えられた植物はオアシスとして見るができる。曲線の石敷きは砂漠の砂の波紋として想像することもできる。

またボゴタの民家庭園は樹木の植栽割合が半数以下である。日本では小さな庭でも樹木を植えるのが一般的であるが、ボゴタでは半分以上が樹木なしの草本性植物だけの庭である。イギリスの地理学者ジェイ・アブルトンは風景の美的感覚は太古の行動メカニズムに由来するといひ、品田は樹木の配置が危機に陥ったときの身の隠しどころを感じるほど安心感があるという(篠田, 1990)。日本のような森の民は庭に樹木を植えることで安心感を得、砂漠の民は見通しのきく草高の低い植物の植栽で安心感が得られるのであろう。ボゴタの庭のように樹木を選択することなく草本類だけを好んで植栽することは、砂漠の民の深層心理が働いているのかもしれない。

日本の民家庭園でイネ科やカヤツリグサ科植物が利用されることは極めて少ない。道下ら(2004, 2005, 2006)は、紀伊半島南部や伊豆半島、長崎平戸・松浦地区の民家庭園の調査を行っている。民家庭園に植栽される植物は数百種にのぼるが、イネ科植物では竹類が多い。カヤツリグサ科ではシュロガヤツリの植栽が見られたが、植栽する民家庭園の割合は低い。調査した地域は古い日本庭園を今に伝え、江戸園芸文化の影響を強く受け、自生の観賞価値の高い種を取り入れた庭園が多かったという。また食用、薬用など観賞以外の割合も極めて低いと報告している。

観賞イネ科やカヤツリグサ科植物は、花を觀賞する花き類や花木類に比べ色鮮やかさがなく、地味であり、草姿も見栄えがいいとはいえない。それにもかかわらずコロンビアのボゴタでイネ

科やカヤツリグサ科植物が植えられる背景は、コロンビア人の元風景に因むものと思われる。ボゴタに四分割の庭園様式を持ちこんだのは旧宗主国のスペインである。スペインは長い期間(8~15世紀)イスラム勢力の支配下にあり、イスラム文化の影響を強く受けてきた。パテオもイスラム建築の様式であり、四分割の庭園様式もその一つである。それがイスラム勢力を退けた後に新大陸に伝わったものである。それだけイスラム建築様式がスペインに深く根ざしていたことになる。

しかしイスラム建築様式はボゴタの旧市街地を除いて見ることは少ない。特に都心から北にある新興住宅地ではパテオを持つ建築物は少ない。庭は建物の外側にあり、道路に面して造られている。その庭は小規模ながらも一つの宇宙をかたちづくっている。庭には植栽間に白い石礫が敷きつめられ、イネ科やカヤツリグサ科植物が植栽されている。石礫は歩道として敷きつめられたものでなく、庭の構成として敷かれている。また高木性の樹木類が少ないことなどから、砂漠など乾燥地の景観が再現されているように見える。あるいは砂漠のオアシスの再現かもしれない。

ボゴタでは植民当初にイスラム建築様式を導入定着させ、その後乾燥地の景観を都心から北の新興住宅地に再現したように思える。

謝辞

本報は JICA シニア海外ボランティアとして

コロンビア滞在中にまとめたものである。関係各位に感謝の意を表す。またコロンビアの庭について論議に参加していただいた造園専門の元シニア海外ボランティアの杉田利之氏(元千葉県松戸市役所)にも感謝を申しあげる。

引用文献

- 岩切正介 2002. スペイン・イスラム庭園探訪. 横浜国大教育人間科学部紀要Ⅱ人文科学 4: 51-69.
- 神谷武夫 1989. イスラムの庭園. 鹿島出版.
- 加藤周一 1989. 日本の庭. 昭和文学全集 28 巻. 小学館.
- 道下雄大・梅本信也・山口裕文 2004. 紀伊半島南部の民家庭園における維管束植物相. 大阪府大院農生学術報告 56: 29-44.
- 道下雄大・梅本信也・山口裕文 2005. 伊豆半島の民家庭園における維管束植物相. 大阪府大院農生学術報告 57: 33-56.
- 道下雄大・山口裕文 2006. 長崎県平戸松浦地域の民家庭園における維管束植物相. 大阪府大院農生学術報告 58: 13-37.
- 篠田勝英訳 1990. オギュスタン・ベルク日本の風景・西欧の景観. 講談社.
- 鳥居徳敏 2009. スペインの庭 (1). 麒麟 18: 13-33. 神奈川大学.
- 鳥居徳敏 2010. スペインの庭 (3). 麒麟 19: 63-89. 神奈川大学.
- 和辻哲郎 1979. 風土. 岩波書店